

『ライ麦畑でつかまえて』における英語 その六 直喩的表現— ‘as hell’ その他

杉 浦 銀 策

He was but a poor man himself, said Peggoty,
but as good as gold and as true as steel —
these were her similes.
— Charles Dickens, *David Copperfield*

(一)

『ライ麦畑でつかまえて』を読み始めて、早くも第一ページの十一行目で次のような文章に出くわす。(初版のハードカバーでは第三ページの十行目)

They're *nice* and all — I'm not saying that — but they're also touchy as hell. (3 ; 1)
両親はいい人たちだ。だからぼくはそのことを言っているんじゃないんだ—でも同時にひどく神経質でもあるんだ。

前稿でも述べたように、文中の ‘as hell’ は主として形容詞のすぐ後に来て、その形容詞の意味を強める働きをしている。ホールデンはこの ‘as hell’ が大好きで、ほとんどやみくもに多用する。『ランダムハウス英和大辞典』第二版はこの ‘as hell’ の用例として ‘He sounded interested as hell.’ (ひどく気をそそられたようであった) を挙げているが、これは明らかに『ライ麦畑』の次の会話を借用したものだ。

“Do you think so?” she (=Mrs. Morrow) said. She sounded interested as hell.
(71, 55)

「そう思います？」と彼女は言った。ひどく興味をそそられたような口ぶりだった。

ところで安藤貞雄氏は「*The Catcher in the Rye* の英語」の中で次のように

述べている。

As hell は、形容詞（まれに副詞）を強める。‘(as) ...as hell’ という直喩 (Simile) の ‘as’ が落ちた形式である。¹

...as hell が形容詞（ならびに一部の副詞）を修飾するのに対して、*like hell* がもっぱら動詞を修飾することは注目に値する。²

前者の発言に注釈を加える前に、後者の「注目に値する」とは具体的にどういふことか、について私なりに一言述べておかねばならない。これは前回取り上げるべきだったのだが、ついうっかりして印刷が出来上がってから思い出す始末で情けない。

‘like hell’ が形容詞を修飾するということは、ホールデンの場合に限らず、他の作家たちにおいてもまずないようだ。これはそもそも ‘like’ を用いた直喩的表現が形容詞を修飾することが珍しいということに起因するものだろう。たとえば『ランダムハウス英和大辞典』第二版では、‘(as) silent as the grave’、‘(as) quiet as the grave’ など形容詞を修飾する例のみを挙げて、‘quiet like the grave’ は取り上げることをしない。ところが成美堂の『現代英語学辞典』の ‘Simile’ の項では、‘quiet like the grave’ という形式をとることもある、と説明されている。ただ残念ながら、この辞典は出典を明らかにしていない。

‘like’ を用いた直喩的表現が形容詞や副詞を修飾する例については、ときどきではあるが見かけることがある。早い話が、‘crazy like a fox’ というアメリカの俗語的直喩がある。『ランダムハウス英和大辞典』第二版では次のような説明がなされている。

crazy like a fox (話) キツネのようにもものすごく抜け目ない。S.J. Perelman の著作 (1945) の題から。

HDAS では、‘crazy like [or as] a fox seemingly foolish but in fact extremely cunning’ という定義を与えたうえで、パールマンの著作の表題 (1944) よりも三十数年前の一九〇八年の用例を挙げている。

1908 in Flemming *Unforget*. Season 107: Showing the doubting tommies that he

was crazy like a fox.

半信半疑のおてんば娘たちに、彼がなかなか隅に置けない奴だと教えてやって。

またその他にも、市川三喜博士の『英文法研究』の「英語特有の Simile」には次のような例が載せられている。³

We all get on swimmingly, like beans in a pot.

An after-dinner speech ought to be short and sweet like a burned almond.

ここで博士は、どうしてこういう直喩が生まれたかについての内容的な吟味を行っている。たとえば ‘swimmingly’ (仲よく) は「鍋の中に浮いている [swimming] 豆と洒落れたもの」とか、「‘short’ は又菓子などのカリカリした即ち ‘crisp’ といふ意味なればそれにて焼いた杏仁にかかる訳である」といった具合である。

私自身が見かけたものとしては、『嵐が丘』と『ハックルベリー・フィンの冒険』における次の二例である。

“You are miserable, are you not? Lonely, like the devil, and envious like him?”⁴

「あなたは惨めなひとです。そうでしょう？ 悪魔のように孤独で、悪魔のように嫉妬深いんでしょう？」

She (=Miss Sophia) was gentle and sweet, like a dove, and she was only twenty.
(XVIII, 144)

ソファエア嬢は鳩みたいにやさしくて可愛らしかった。それにまだ二十歳。

これらの例はいずれも形容詞ないしは副詞と ‘like’ の間にコンマがあつて、一呼吸置くといった感じが市河博士の最初の例と似ている。コンマなしの例としては、次のようなものがある。ウィリアム・ギャスの『トンネル』および『ウィリー・マスターズの孤独な妻』からのものである。これらの作品には他にも似たような例がある。

And not because experience couldn't bring them to wisdom better than the Greeks, either, but because experience is broad and muddy like the Ganges, with the filthy and the holy intermixed in every wash;....⁵

経験もまた彼らをギリシャ人以上の知恵に導くことができなかったからというのではない。そうではなくて経験というものはガンジス川のように広々としてかつ濁っていて、そのあらゆる水の流れには汚濁と聖性が混ざり合っているからだ…。

...; anyway how do you think you're going to get out, down here where it's dark and oily like an alley, meaningless as Plato's cave?⁶

…とにかく裏通りのように暗く油だらけで、プラトンの洞窟のように無意味な、こんなところでどうやって抜け出そうと思っているのかね。

このように 'like' による直喩も形容詞や副詞を修飾することが可能なのであるが、'like hell' そのものが形容詞ないしは副詞を修飾する例はまったくないといってよい。これはやはり 'like' を含む直喩は主として動詞を修飾するものだという通念からきているのだと思う。

さて思わぬところで長々と道草を食ってしまったが、本題つまり安藤氏の第一の発言に戻ろう。

'as hell' はもともと英語における直喩の一環として発生した。OEDによれば、英語の直喩は古英語の 'swa beorht swa gold' に始まり、'swa' が 'all' によって強められ、'all swa beorht swa gold' あるいは 'alswa brihht alswa gold'、'alswa briht alse gold'、'alse bricht as gold'、等となり、最後に 'as bright as gold' に落ち着いたことになっている。また先行する 'as' が落ちる現象が十二世紀頃現れ、今日辞書で '(as) bright as gold' というような記載がなされるようになった。

したがってたとえば「泥酔している」を英語では '(as) drunk as a (drowned) mouse' というが、同じチョーサーでの『カンタベリー物語』でも次のような二通りの言い方がなされるというのも、自然なことであった。

Thou comest home as dronken as a mouse,...⁷

ぐでんぐでんに酔っぱらって帰宅する。

We faren as he that dronke is as a mous,...⁸

まるで酔っ払いのように振る舞う。

もちろん今日、正式には ‘as’ を二つ揃えるのが望ましいという意識が英米ひとにはあるらしく、エヴリマンズ・ライブラリー版の『カンタベリー物語』の編者は後者の引用に ‘We behave like someone as drunk as a mouse.’ という現代語訳を付している。また ‘as hell’ についても、H.L. メンケンの『アメリカの言語。補遺 I』には ‘as cool as blazes (cf. as cold as hell)’⁹ という記述があり、さらには *OEDS* は ‘hot’ の項目で、‘1967 *Word Study* Dec. 4/1 One of the most common comparisons in English — probably “as hot as hell” という一文を紹介している。

ではこうした直喩の一環として発生した ‘as hell’ は文献上どのあたりの年代にまで溯ることができるのだろうか。このことについて調べる際に、*HDAS* が *OED* よりも古い用例を挙げているので有り難い。それによると大体次のようになる。

1511 in Tilley Prov. in Eng. 306: It is...derke as hell.

1563 in Tilley Prov. in Eng.: As black as hell.

1619 in Tilley Prov. in Eng.: As false as hell.

「地獄のように暗い」とか、「地獄のように黒い」という言い方はごく自然な比喩であり、この点 *OED* に引用されている「地獄のように黒い罪」(‘1640 sin...black as hell’) も同断である。また「地獄のように不貞な」や「地獄のように空腹の」、あるいは「地獄のように度し難い妄想」なども分かるような気がする。

Heaven truly knows that thou art false as hell.

— Shakespeare, *Othello*, IV . ii. 39.

お前が汚らわしい不貞をはたらいていることは、神様がよくご存じだ。

1775 in Whiting *Early Amer. Prov.* 209: Hungry as hell. (HDAS)

1780 Cowper *Progr. Err.* 609 He that will be cheated to the last, Delusions strong as Hell shall bind him fast. (OED)

最後まで欺かれる者、そは度し難き妄想にきつく縛られるべし。

今日われわれがヘミングウェイの『われらの時代』(1925)を読んで、その中に出てくる「地獄のように空腹だ」という表現がすでに十八世紀のアメリカで使われていたということは、少なくとも私にとってはちょっとした驚きである。

“Are you hungry, Nick?”

“Hungry as hell.”¹⁰

それというのも、十九世紀のアメリカ文学では‘as hell’が一種の冬眠時期に入った感じがするからであろう。もちろん一般に俗語的・方言的用法としては連綿と使われつづけてはいたが、著名な作家の作品に侵入してくることはあまりなかった。前稿で紹介したように、一九三一年にメリウエザーなる人が論文「アメリカ語における *hell*」で「マーク・トウェインは‘hot as the hereafter’という冗談めいた婉曲法を創り出した」と書いていたが、トウェインの時代は‘hot as hell’を創作に持ち込むことを許さなかったということである。ハックは‘dark as hell’とは言わず、‘dark as sin’と言う。

... : dark as sin again in a second... (IX, 76)

…次の瞬間またしても真っ暗闇になった

それが二十世紀に入るや、あるいは第一次世界大戦あたりからというべきか、やたらと目につくようになった。ヘミングウェイの書簡集では、1918 ‘lonesome as hell’ から始まって ‘1919 wild as the devil’、‘1921 sleepy as the deuce’、‘1924 healthy as hell’、‘1928 lonely as a bastard’ など多様な使い方がなされる。そしてまたしてもドス・パソスの『三人の兵士』で恐縮だが、

“Say, fellers, I'm dry as hell! Let's order another bottle.” (77)

「おいみんな、おれは喉がからからだ！ もう一本注文といこうや」

などとなかなか調子のよい使い方がなされる。

‘as hell’の歴史的コンテクストの中に『ライ麦畑』を置いてみると、特別変わったことは何もないのだが、ここでもまたホールデンの使い方の特徴は使われる頻度の多さ、無節操な乱用ということにある。反復の単調さ。また修飾される形容詞も、‘religious as hell’、‘sunny as hell’など〈地獄〉と縁のないものまで使う。これまた『ハック・フィン』の‘bright as glory’ (IX, 76)とは大きな違いがある。また私などは、ホールデンがどうせ数十回以上も‘as hell’を使うのなら、たまにはスタインベックの次の例のように、一般的な直喩と‘as hell’の組み合わせをして見せてもよさそうなのにと感じてしまう。

He (=Doc) was concupiscent as a rabbit and gentle as hell.¹²

ドックはウサギのように好色で、同時になんとも気が優しい人であった。

‘as hell’が単なる強意語句になってしまっているのだから、〈地獄〉と無縁ないしはそれと正反対のイメージの形容詞と一緒に使うことは異とするに足りないのだが、とにかく『ライ麦畑』において‘as hell’が修飾する形容詞ないしは副詞は五十種類にも及ぶ。なかには‘these two playful as hell slaps on both cheeks’ (33;25) [ふざけて両方の頬に平手打ちを軽く二発] や ‘these playful as hell socks at my shoulder’ (55;42) [ふざけて肩に強打を数発] といった凝ったものもあるが、‘cool as all hell’ (265;205) [ひどく冷静に] を含めてすべて紋切り型といってよいだろう。

だがここで注目されるのは、ホールデンにあってはありとあらゆる形容詞が‘as hell’による修飾の対象になり得るようである、必ずしもそうではないということだ。たとえば、私は前回〈直喩的表現——‘like hell’その他〉において不注意にも「彼はこうした場合‘feel lousy (as hell)’と言う」と書いてしまったが、じつのところ『ライ麦畑』には‘lousy as hell’という表現は一度も出てこない。なぜだろうか。それは、ホールデンが愛用する俗語的形容詞、‘crumby’、‘corny’、‘phony’などはそれだけである種の俗語的どぎつさを含んでいるために、これらを敢えてこれまた俗語的副詞句である‘as hell’で強める必要がないということなのであろう。そしてこれが本稿におけるささやかな発見の一つであった。

つぎに『ライ麦畑』における‘as hell’以外の一般的な直喩的表現について検討してみることにする。

『ハックルベリー・フィンの冒険』を少し注意深く読むと、そこに現れる直喩はじつに多彩で、いくつもの奇抜な表現に目が回る思いがする。しかしそれはどう見ても十四、五歳の少年ハックにはそぐわないものだ。やはり作者マーク・トウェインの天才が少年の言葉遣いを操っているとしか思えない。またマージョリー・ローリングズの『子鹿物語』(*The Yearling*, 1938)でも、この少年物語にふさわしい、斬新かつ独創的な直喩がたくさん見られる。この点、ホールデンはやや貧血気味の印象を与えずにはおかない。しかしそれはそれとして、一応それがどんなものか以下に見てみよう。

まずホールデンにおける直喩的表現を、片方の‘as’が落ちているものと、‘as’が二つ揃っているものとに分け、前者を先に扱うことにする。これはわずかに五例しかないが、これら五つの例を列挙したあと、それぞれについて簡単なコメントを付してみたい。

- 1) ‘cold as a witch's teat’ (7 ; 4) (魔女の乳首みたいに冷たい [寒い])
- 2) ‘sharp as a tack’ (14 ; 10) (鋌のように鋭い、非常に利口な、ぐさりとくる)
- 3) ‘hot as a firecracker’ (16 ; 12) (爆竹みたいにカッカして)
- 4) ‘drunk as a bastard’ (38 ; 29. 194 ; 150) (馬鹿みたいに酔っ払って)
- 5) ‘blind as a bat’ (180 ; 139) (コウモリみたいに何も見えない)

ホールデンにおけるこうした直喩は一見新奇なもののようにいて、じっさいはそうではない。十七歳の平凡な少年が新奇な直喩を創出してはかえって不自然ということか。

コメント

- 1) の ‘cold as a witch's teat’ について。これはいかにも新奇なという感じではあるが、オリジナルなものではない。『ランダムハウス英和大辞典』

第二版を引くと、次のような説明があり、むしろこちらの方の多様さ、多彩さに驚かされる。

(as) cold as ice [or a bastard, bitch, charity, hell, Kelsey's ass, ((英)) a tomb, a welldigger's ass (in Klondyke), ((米俗)) a witch's tit ひどく冷たい (寒い)

また *OEDS* を引いてみると、‘cold as a witch's tit’ の最も古い例として

1932 Van Wyck Mason *Spider House* xviii, 210 It's cold as witch's tit outside.
外は魔女の乳首のように寒い。

が挙げられている。Van Wyck Mason (1901-78) はアメリカの小説家であるが、もっと古い用例の発見が望まれるところである。

また上記のメリウェザーの論文「アメリカ語における *hell*」に “Among other adverbial expressions, a common one is the *as-than hell* combination.”¹³ と書いているように、‘as hell’ とともに ‘than hell’ も同時に考察の対象となるべきものである。ただし ‘than hell’ の例は『ライ麦畑』には登場しない。以下に四つの例を挙げておく。

“You sick, Grampa,” Noah asked.

“You goddam right,” said Grampa weakly. “Sicker'n hell.”¹⁴

「おじいちゃん、具合が悪いんかい？」ノアが尋ねた。

「そうなんじゃ」とじいさんが力なく言った。「もう駄目なくらいさ」

“...Irvine Vibert, who had come crashing out of the Louisiana canebrake one morning — young, smarter than hell, and insane with greed.”¹⁵

「…このアーヴィン・ヴァイバートという奴、ある朝ルイジアナ州のサトウキビ畑から飛び出してきた男だが、若くて、なんとも抜け目がなく、強欲さで気が狂わんばかりだったね」

‘colder than a witch's tit’ の変形については、これが言葉の魔術師たるトマス・ピンチョンのような大型作家の手にかかると、次のようになる。

Colder than the nipple on a witch's tit!

Colder than a bucket of penguinshit!

Colder than the hairs of a polar bear's ass!

Colder than the frost on a champagne glass!¹⁶

魔女の乳首よりも冷たい！

バケツ一杯のペンギンの糞よりも冷たい！

北極熊のお尻の毛よりも冷たい！

シャンパングラスの霜よりも冷たい！

『重力の虹』からの引用であるが、きっちり韻まで踏んであるのだから恐れ入る。

最後にケネディ大統領の発言から。

To my surprise, the President dismissed my comment with a gesture of impatience, saying, "George, I always thought you were one of the brightest guys around there, but you're just crazier than hell. That just isn't going to happen."¹⁷

驚いたことに大統領は苛々した身振りで私の批判を斥けながら、こう言った。「ジョージ、ぼくはきみがあのあたりでは最も頭の切れるやつ一人だといつも思っていたが、そのきみがとんでもないことを言うんだね。そんなこと起こりっこないさ」

これは、一九六〇年代の初めに、アメリカ政府がヴェトナムに軍隊を送り込めば、泥沼にはまる恐れがあるという警告に対して、ケネディ大統領が答えた言葉の一部だという。‘...than hell’ は、アメリカ東部のエリート階級出身の大統領すら使用していたとなれば、もはや品の悪い俗語などではなく、れっきとした口語的表現であるということになる。

2) ‘sharp as a tack’ は ‘(as) sharp as a needle [or razor]’ のアメリカ版である。OEDS はアメリカ方言誌から次のような転載を行っている。

1912 *Dialect Notes* III, 589 They won't fool him; he's a sharp as tacks. (あいつは頭が切れるので、バカにされることはないさ)

これも一九二〇年代のアメリカ北東部で一般によく使われていたらしく

く、前回紹介しておいたマーガレット・ハーディのリストに載せられている。

3) ‘hot as a firecracker’ について。‘firecracker’ 自体が十九世紀前半にアメリカで誕生した言葉であるからには、これもアメリカに起源を持つ直喩であるはずだ。ただしホールデンの invention であるかどうかは分からない。とにかくストウ夫人の『アンクル・トム的小屋』の次のような〈爆竹〉を含む会話の言い回しを思い起こさせる。

“The boy is generous and warm-hearted, but a perfect firecracker when excited.”¹⁹

「心が広く温かい子なのですが、興奮するとまるで爆竹ですからね」

これは Mitford M. Mathews, *A Dict. of Americanisms* や *HDAS* に引用されている例である。ホールデンの言う ‘hot as a firecracker’ が引用されていないのは残念である。

4) ‘drunk as a bastard’ これはれっきとしたアメリカの俗語。*HDAS* では次のような例が示されている。先に挙げたヘミングウェイの書簡に見られるものよりも五年早い例である。

1923 Ornitz Haunch 68: He grew up and was smart, smart as a bastard, just as the saying goes.

あいつは成長して利口になった。世間の言い習わし通り、どえらく利口になった。

1945 S.J. Baker *Australian Lang.* 166: Drunk as a bastard.

ぐでんぐでんに酔っ払って。

ホールデンは二回 ‘drunk as a bastard’ を使っているが、もちろん安藤氏の指摘通り、‘drunk as hell’ (118 ; 90) と同義である。要するに、*OED* に挙げられている次のような古い例と大差ないということだ。

1622 Be drunk as a beggar, he helps you home.

乞食のように酔っ払いなされ。あのお方が家に連れて行ってくれるさ。

5) 'blind as a bat. これは昔から使われてきた直喩。OEDに '**bat-blind, as a bat in the sunlight**' とあるように、日中目が見えないコウモリというイメージと頭韻の響きの相乗効果を狙って出来た直喩である。以下にメルヴィルの『白鯨』とパウンドの『詩篇』からの例を挙げておく。

"But, Lord, look you, sir — hearts and souls alive, man — the next instant, in a jiff, I was blind as a bat — both eyes out — "20

「ところがなんともいやはや、たまげたね——次の瞬間、あっという間にわしはコウモリのように盲目になっちまった——両眼ともすっかり見えなくなっちまったんだ…」

And poor old Homer blind, blind, as a bat, Ear, ear for the sea-surge, murmur of old men's voices:...²¹

哀れ老ホーマー、コウモリの如く盲い、盲いて、沸き立つ海にも似た、老人たちの声のざわめきに耳、耳を傾けて

『ライ麦畑』における以上のような五つの直喩的表現は、独創的といえるものがほとんどない。また先行する 'as' が省略されているのも、口語的表現の簡潔さを重んじてのものであろうし、いずれも 'as hell' で置き換えることのできるものばかりである。

では『ライ麦畑』で、'as' が二つ揃っているものとしてどういう例があるだろうか。これまたたった五例しかない。

1) I had part of a cup of coffee and about half of some cake that was as hard as a rock. (241 ; 185) ぼくはコーヒーを少しと石ころみたいに固いケーキを半分ほどいただいた。

2) Sensitive. That killed me. That guy Morrow was about as sensitive as a goddam

toilet seat. (72 ; 55)

感受性が強いだって！ これは参ったね。モローのやつ感受性なんかトイレの便座並みではないか。

3) ...but while He was alive, they (=the Disciples) were about as much use to Him as a hole in the head. (130 ; 99)

しかしキリストが活着している間の十二使徒は、キリストにとってなんの助けにもならなかった。

4) She was about as kindhearted as a goddam wolf. (181 ; 140)

あの女の心が優しいというなら、狼の心だって優しいということになるさ。

5) He was a skinny little weak-looking guy, with wrists about as big as pencils. (221 ; 171)

彼は瘦せて、体が小さく弱々しそうな生徒で、手首なんか鉛筆ぐらいの太さだった。

これら五つの引用はすべて ‘as’ が二つ整っていることを特徴としている。以下にここでも簡単なコメントを加えることとする。

1) の ‘as hard as a rock’。ここでホールデンが ‘as’ を二つ揃えたのは、これがほとんど定型化してしまった直喩であるからだろう。

2) の ‘about as sensitive as a goddam toilet seat’。これは 1) と違って ‘as hell’ で置き換えることはできない。否定の意味を含む反語的直喩だからだ。それに ‘about’ を先行させているので、よけいに ‘as’ を省くことができなくなる。ホールデンのこの直喩は秀逸である。彼の独創なのかもしれない。

3) の ‘as a hole in the head’ これも前項同様反語的直喩であり、かつ ‘about’ が先行しているからには、‘as’ を二つ揃える必要がある。またこれは一見奇抜な直喩のようであるが、conventional なものである。『ランダムハウス英和大辞典』第二版では次のような説明がなされている。

need [or want]... like a hole in the [or one's] head / need [or want]... like [or as much as] one needs [or wants] a hole in the head [or one's] head (俗) …は全く必要でない、お呼びでない、誰がそんなの要るか。a hole in the head は「銃で頭にあけた穴」の意。

しかし「銃で頭にあけられた穴」という説明は、いまひとつすっきりしない。

HDASは‘need like a hole in the head=to need not at all; be better off without’ と定義づけたあと、次の用例を挙げているが、起源については触れていない。

1944 in *Best from Yank* 69: The Partisans need chowchow like they need a hole in the head.

パルチザンたちはチャウチャウなんか全然必要としないんだ。

この辞書に挙げられている例を見る限り、この俗語的成句は今日まで連続と使われてきていることになる。また‘hole in (one's) head=a lack of good sense’が一九二〇年代からアメリカで使われていることも、この辞書で分かる。

一方、DASの説明では、

‘hole in the (one's) head’ Anything that is undesirable or ridiculous as having an actual hole in the head would be. *Usu. in the expression* “to need [it] like a hole in the head.” *A very pop. expression c1948. Pop. by comedians; contains elements of Jewish wit.*

となっている。頭の中に穴があいたら、それこそ大変。落語や漫才のジョークの材料にうってつけということになる。

OEDSは次のような有益な説明をしたあと、『ライ麦畑』からの引用も行っているので、サリンジャーにとっては名誉なことといえよう。そして結局のところこの種の直喩はイディッシュ語に起源を持つものらしいということも判明する。

a hole in the head, esp. in phr. to need (something) like a hole in the head (cf. Yiddish *ich darf es vi a loch in kop*): applied to something not desired at all or something useless.

ここに引用されているイディッシュ語はご覧のようにドイツ語と非常によく似ているが、「頭の中の穴のように」という成句はドイツ語の辞書には見られない。そこで簡便なイディッシュ語の俗語と慣用句を集めた辞書を覗いてみる。するとまずイディッシュ語では ‘loch in kop’ (‘hole in the head’) が慣用句として定着していることが分かる。また ‘Ich darf es vi a lung un leber ahfen noz. (I need it like a lung and liver on my nose; I need it like a wart on my nose.) および ‘Ich darf es vi a loch in kop! (I need it like a hole in the head!) という比喩的表現がイディッシュ語で日常的に愛用されていることも分かる。²²

ただホールデンが通常の ‘like’ を含む直喩を ‘as...as’ による直喩に変えたというあたり、なかなか面白いな、と私は思う。

4) の ‘as kindhearted as a wolf’。これもホールデンらしい辛辣な反語的直喩で、‘as a wolf’ を ‘as hell’ で置き換えることができないという意味で二つの ‘as’ を必要とする。

5) の ‘as big as pencils’。これも面白い。ホールデンのささやかな独創によるものであろう。ドス・パソスの『マンハッタン乗換え駅』には

Alice wore glasses and had legs thin as hairpins.²³

アリスは眼鏡をかけ、ヘアピンのように細い脚をしていた。

という直喩が見られるが、ホールデンにはこうした派手な比喩は思い浮かばない。しかし「鉛筆ほどの太さの手首」というのは、いかにもハイスクールの生徒らしくてほほえましい。

以上『ライ麦畑』における ‘as...as’ の直喩についてコメントを加えてきたが、その中の四つの反語的直喩は、いずれも ‘about as...as’ というぐあいに ‘about’ が付加されているあたりに、ホールデンの優しい気遣いが見られると

いってよいだろう。つまりそれは、これらにおける反語的意味の強烈さを幾分なりとも緩和しようとする、あるいは風刺の相手、皮肉を浴びせる対象の心が傷つく度合いを少しなりとも和らげようとする半ば無意識的な気遣いのことである。

なお蛇足を一言付け加えるならば、‘as...as’を修飾する‘about’の位置に関してであるが、‘about’ないしは‘around’は二番目の‘as’の直前にくる場合が多いようで、たとえば *OED* には ‘1653 as big about as the compass of a two pence’ という例が挙げられ、また『ハック・フィン』では ‘...and as big around as a church’ (III, 32) という例が見られる。いったいホールデンの言う ‘about as...as’ と *OED* の言う ‘as...about as’ のいずれがより一般的なのだろうか。現在の私にはなんとも言えない。

最後に ‘as hell’ が形容詞ではなく、副詞を修飾する場合について考えてみる。

『ライ麦畑』で ‘as hell’ によって副詞が修飾される例は、大体次の通りである。

- 1) “So what?” I said. Cold as hell. (54 ; 41)
- 2) — I said it fast as hell,... (90 ; 65)
- 3) ...he said, innocent as hell. (135 ; 103)
- 4) ...but it sure as hell didn't do it any good. (147 ; 113)
- 5) ...opened our door, quiet as hell. (205 ; 158)
- 6) ...I went into D.B.'s room quiet as hell, (206 ; 159)
- 7) ...if you hold her close as hell, (227 ; 175)
- 8) Then, quick as hell, she sat the hell up in bed. (229 ; 176)
- 9) ...walking fast as hell up to our school -- (259 ; 199)
- 10) They stuck close as hell to me, (264 ; 204)
- 11) ...and light a cigarette, cool as all hell. (265 ; 205)

安藤氏はこの問題について次のように述べている。[引用のページ数はペンギン版からのもので、本稿における引用のページ数とは食い違う]

以上のように、*as hell* が形容詞を修飾する例は枚挙にいとまがないくらいであるが、副詞を修飾する例は、次の2例しか見つからなかった。

(9) I said it fast as hell. 74 (ぼくは、それをすごく早口に言った)

(10) but it sure as hell didn't do it any good. 118 (しかし、それはまったくたしかに、まるで役に立たなかった)

しかも、*fast* も *sure* も、形容詞と同形であることが条件になっていることに注意。*as hell* が直喩であるからには、たとえば、*He ran away quickly as hell* のごとき、*-ly* 副詞をとる例は起こらないのではないか。

安藤氏は形容詞と副詞の区別を非常に厳密に設定しているようであるが、私はもう少し柔軟性をもたせた方がよくはないかと思う。たとえば8)の‘*quick as hell*’の‘*quick*’は同じ『ライ麦畑』の‘*I quick jumped up and ran over and turned off the light over the desk.*’ (229; 176)の‘*quick*’と同様まぎれもなく副詞であろう。

たしかに両者の区別を明確にするのは難しい場合もある。たとえば次の『嵐が丘』に見られる‘*chill*’と‘*high*’のような場合、これらを形容詞として見做すのが穏当なのかもしれない。

“Missis walked in,” she said, “as chill as icicle, and as high as princess. — *Wuthering Heights* (349)

「奥様が入ってこられました」と彼女は言った。「まるで氷柱のように冷たく、女王様のようにお高い様子でしたわ」

しかし以下の例に見られる‘*close*’、‘*stiff*’、‘*swift*’等は副詞として扱うべきではあるまいか。

To seal her father's eyes up close as oak... — *Othello* III, iii, 210

鷹の目を塞ぐやうに親の目を真暗闇にして… [市河三喜博士訳]

“Hope you have had a pleasant evening, ma'am,” said Peggotty, standing as stiff as a barrel in the centre of the room....²⁵

「楽しい夕べだったことでしょうね、奥様」とペゴティは部屋の真ん中で樽のように身体をこわばらせて立ったまま言った。

That swift as quicksilver it courses through

The natural gates and alleys of the body... — *Hamlet* I , v iii, 210

毒液が身体のさまざまな欠陥の中を
水銀のごとく素早く流れこんでゆく。

...: swift as the first light that slides from the sun, Pierre saw all preceding ambiguities, all mysteries ripped open as if with a keen sword...²⁶

…朝日から発する最初のひかりのように素早くピエールは、まるで鋭利な刀剣にでもよるかのように、これまでのあらゆる曖昧さ、謎が引き裂かれるのを見てとった。

安藤氏の「*as hell* が直喩であるからには、たとえば、*He ran away quickly as hell* のごとき、*-ly* 副詞をとる例はおこらないのではないか」という発言について、少しばかり考えてみたい。

これは優れた英語学者の鋭敏な直感によって支えられた発言であると思う。‘*as hell*’ が *-ly* 副詞を修飾することはまずあり得ない。のちほど具体的な例によって再確認してみるつもりであるが、たしかにその通りなのである。ただ私にとっては、「直喩であるからには」という表現は若干厳密さに欠ける嫌いがあるように思われる。それは、*-ly* 副詞はいかなる場合も直喩の対象になり得ないという結論を導く虞れがあるからだ。成美堂の『現代英語学辞典』の‘*Simile*’ の項目には次のような記述がある。しかしここでも残念ながら出典が示されていない。

先行の形容詞を副詞に転じて利用することもある。*As merrily as a marriage, quickly as a flash.*

一般的にあって、たしかに直喩に *-ly* 副詞を使用することは少ない。たとえば上記『ハムレット』や『ピエール』に見られるように、*-ly* なしの副詞を使うのが普通である。これに対して、‘*as*’ に導かれる従属節と一緒に場合には、次のように *-ly* 副詞を使用する。

...and as quickly as the lightning flash could blazon it abroad his name was on every tongue, from end to end of this country.²⁷

氏の名前は電光石火の速さで世に広まり、広大なこの国のいたるところで

誰もかれもが氏のことを口にするようになりました。

She mentioned, and forgot —

Then lightly as a Reed

Bent to the Water, struggled scarce —

Consented, and was dead —²⁸

彼女は何かを言いかけ、そして忘れた—

それから葦が水辺にかしぐように

そっと、ほとんどもがき苦しむこともなく—

うなずくようにして死んでいった—

ただたとえば同じ従属節のものでも、話し言葉（方言的・俗語的）では単純副詞（flat adverb）、書き言葉では -ly 副詞をと言う具合に使い分けをするのが普通のようなのである。

“...but a woman's heart is different; them feelin's comes back when you think you've done with 'em, as sure as spring comes with the year.”²⁹

「…でも女のひとの心は違うんです。そうした感情がおしまいになったと思っても、年とともに春が来るのと同じく必ず繰り返すのです」

Holden divulges his room number, and a woman — in the flesh — will follow as surely as the night the day.³⁰

ホールデンがルームナンバーを明かすと、それにつづいて、なんと生身の娼婦が予定通り間違いなく姿をあらわす。

だがそれにしても直喩的表現はほんとうに -ly 副詞を用いることがないのだろうか。次のような例を見るにつけても、どうやらそうらしいところもある。

Sudden as winking, the ornery old cretur went all to smash, and fell up against the man,... (*Huck Finn*, XXXIV, 210)

アッという間にあの汚らしい爺さん野郎、へなへなとなりゃがってよ、その男に倒れかかっちゃまった…。

In any neighborhood there'd be surely be paths of concealment crisscrossing it, and those virginal countries with their small bald vaginas too, where I could go as sudden as surprise into retirement — into my secret company, my private childhood, and my conspiracies.³¹

どんな生活環境にいても必ずそれを縦横に交差する潜伏の道があり、まだ毛も生えていないちっぽけな、毛の生えていないヴァギナしか持たない田舎の処女地があった。そしてそういう道や土地でぼくは抜く手も見せぬ早業で姿を隠し——内輪の仲間、自分一人だけの幼年時代、秘密の謀議へと逃げ込むことができた。

ここでは 'suddenly' が -ly なしの副詞 'sudden' で置き換えられている。ギャスの場合、わざわざ頭韻を踏んだ直喩を使っている。

しかし同時に -ly 副詞を使った直喩もまた巖として存在する。

Freely as an alighting dove the bill fluttered to the Justice's table.³²

まるで木に留まるハトのように、お札が判事のテーブルにひらひらと舞い落ちた。

On they came, staring straight ahead, as steadily and certainly as ants, yet...³³

彼らは前方を真っ直ぐ見据え、蟻のように着実に確かな足取りでやって来た…。

Polite as patients, all right, and as though disciplined by their doctors, they kicked up no fuss and died quietly as a wind.³⁴

そう、彼らは患者のように礼儀正しく、あたかも主治医の訓練を受けたとでもいうかのように、少しも騒ぎ立てることなしに風のように静かに死んでいった。

...when my father backed it (=the car) from the garage as slowly as slime.³⁵

…そのとき父はヘドロのようにゆっくりとガレージから車をバックさせた。

三番目の例は -ly 副詞と flat adverb の共存である。最後の例はまたしても頭

韻の効果を演出している。

しかしそれでもなお、やはり直喩にあつては、どちらかというところ、-ly なしの単純副詞の方が好まれるらしいという言い方は許され、この意味で安藤氏の言葉は正しかったということになると思う。そしてこれを例証するものとして、私は次の例を挙げておきたい。ここでヘミングウェイはいったん -ly 副詞を使っておきながら、直喩に入った途端 -ly を削除するという芸当を行なっていることに注意しなければならない。

He (=trout) had been solidly hooked. Solid as a rock.³⁶

鱒は針にしっかりとかかっていた。岩のようにしっかりと。

つまり結論としては、第一に一般的直喩あつては、単純副詞はむろんのこと、-ly 副詞も形容詞と同じように使用され得るということ、しかし第二に 'as hell' によって修飾される形容詞ないしは副詞にあつては、-ly 副詞は除外される、この二点を挙げることができる。後者の結論にあつては、おそらく俗語的強意語句である 'as hell' によって強められる副詞が形式張った -ly 副詞ではなにかそぐわない感じを伴うという事情があるものと思う。

注

- 1 安藤貞雄『英語語法研究』142.
- 2 同書 144.
- 3 市河三喜『英文法研究』219.
- 4 Emily Brontë, *Wuthering Heights* (New York: the Modern Library, 1950), 338.
- 5 William H. Gass, *The Tunnel* (New York: Alfred A. Knopf, 1995), 20.
- 6 William H. Gass, *Willie Masters' Lonesome Wife* (1968, Dalkey Archive Press, 1989), [18] この作品にはもともと pagination が^sない。
- 7 Geoffrey Chaucer, "The Wife of Bath's Prologue" in *Canterbury Tales*, ed. A.C. Cawley (Everyman's Library, 1962), 164.
- 8 "The Knight's Tale" in *Ibid.*, 36
- 9 H.L. Mencken, *The American Language: Supplement I*, 663.
- 10 Ernest Hemingway, *In Our Time* (1925; Charles Scribner's Sons, 1958), 57.
- 11 L.W. Merryweather, "Hell in American Speech" in *American Speech* VI, 6 (August 1931), 433.
- 12 John Steinbeck, *Cannery Row* in *Of Mice and Men and Cannery Row* (1945; Penguin Books, 1955), 120.
- 13 Merriweather, 433.

- 14 John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (1939; The Viking Press, Inc., 1967), 184.
- 15 Robert Stone, *Dog Soldiers* (1974; Penguin Books, 1987), 12.
- 16 Thomas Pynchon, *Gravity's Rainbow* (Viking, 1973), 11.
- 17 George W. Ball, "Kennedy Close Up": Review of *President Kennedy: Profile of Power* (New York Times Review of Books, 3 Feb. 1994)
- 18 *American Speech*, V, 6 (August 1929), 467.
- 19 Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin* (1852; New York; Washington Press, 1964), 275.
- 20 Herman Melville, *Moby-Dick*, ed. Charles Feidelson, Jr. (1851; Bobbs-Merrill, 1964), 561.
- 21 *The Cantos of Ezra Pound* (London: Faber and Faber, 1975), 6.
- 22 Fred Kogos (ed.), *A Dictionary of Yiddish Slang & Idioms* (New York: Citadel Press, 1967), 45, 51.
- 23 John Dos Passos, *Manhattan Transfer* (Harpers & Brothers, 1925), 52.
- 24 『英語語法研究』 143.
- 25 Charles Dickens, *David Copperfield* (1849-50; A Signet Classic, 1962), 30.
- 26 Herman Melville, *Pierre; or, the Ambiguities* (1852; Northwestern Edition, 1971), 85.
- 27 Nathaniel Hawthorne, *Life of Franklin Pierce in Hawthorne's Works*, XII (Cambridge: Riverside Press, 1883), 421.
- 28 *The Complete Poems of Emily Dickinson* ed. Thomas H. Johnson (Little, Brown and Co., 1960), 497.
- 29 Sarah Orne Jewett, *The Country of the Pointed Firs and Other Stories* (W.W. Norton & Co., 1982), 8.
- 30 Sanford Pinksker, *The Cather in the Rye: Innocence Under Pressure* (Twayne Publishers, 1993), 63.
- 31 *The Tunnel*, 296.
- 32 O. Henry, "The Whirligig of Life" in *The Pocket Book of O. Henry Stories* (New York: Pocket Books, 1975), 138.
- 33 Peter Matthiessen, *The Snow Leopard* (1978; Bantam Book, 1979), 155.
- 34 *The Tunnel*, 36.
- 35 *Ibid.*, 222.
- 36 Hemingway, *In Our Time*, 151.